

アジア研究教育ユニット 令和2年度教育研究報告書

事業課題名	03 実施事業名：韓国・延世大学校スプリングプログラム
代表者名	国際高等教育院 河合淳子、韓立友、家本太郎 学際融合教育研究推進センター 西島薫
事業概要 (600字程度)	<p>本学の協定校である延世大学校の協力のもとで行われる韓国語講座、文化体験、学生交流を重視したプログラムである。3月5日（金）にクラス編集のための試験が行われ、韓国語の授業は、3月5日（金）～3月18日（木）の約2週間、オンラインで行われた。</p> <p>本プログラムの目的は、(1)留学先の文化、社会、習慣に直接触れ、(2)語学学習への意欲を喚起し、(3)留学先の同年代の学生たちと交流を深めることが本プログラム全体の目的である。特に現地学生との交流を重視し、教室内外で行動を共にする機会を設けることを特徴としている。そして、たとえ短期であっても留学経験を積むことで、(4)将来のより本格的な留学へ発展させること、あるいは(5)各分野で国際的に活躍できる人材の育成へとつなげることである。</p> <p>世界随一の韓国語学習機関である延世大学校韓国語学堂において、6つの参加者のレベルに応じたクラスに入り、世界各地からの留学生とともに学ぶ機会が設けられた。また、延世大学生の参加の下、プレゼンテーションと討論を軸とした日韓の文化、社会事情に関する延世大学一京大学生セミナーも行われた。プログラム終了後のフォローアップとして、京都大学の留学生に担当してもらい、オンライン会話教室を10時間行った。</p>
成果の概要 (800字程度)	<p>2019年は新型コロナウイルスの蔓延によって計画されていた渡航が困難になり中止になってしまったが、2012年から行っている本プログラムは2020年度で9年目となった。今年には14名が参加し、オンラインにてプログラムを実施することができた。</p> <p>本事業の目的と成果を照らし合わせて述べる。</p> <p>(1).留学先の文化、社会、習慣に直接触れる</p> <p>3月11日に行われた延世大学一京大学生セミナーにおいて、ディスカッションを行い、韓国の社会に触れる機会があった。具体的なテーマは、日韓関係、学生生活、ジェンダー、COVID19であった。韓国語の授業中にも、韓国在住の学生とコミュニケーションをとることもできたとの報告が来ている。</p> <p>(2).語学学習意欲を喚起する</p> <p>韓国語の授業は、1コマ50分で行われ、1日で計4回あった。各コマではリーディング、リスニング、ライティング、スピーキング、語彙と文法を学ぶことができ、語学学習意欲を喚起することができた。また、参加学生の報告書にはオンライン開催であったからこそ良い面があったとの記述があった。対面授業では参加学生は学生の表情を確認することができないが、オンライン授業では他の学生たちの顔が見えるので、自分自身の理解度やレベルを相対的に確認することができたとし、クラスとしての一体感をより強く感じることもできたとのことだった。効率的な勉強方法を習得できたとの報告もある。</p> <p>(3).同年代の学生たちと交流を深める</p> <p>前記の延世大学一京大学生セミナーに関して、「ディスカッションを行い、コロナに関して共通の悩みがあることが分かった」との学生同士の共感についての記述や「ジェンダー意識を垣間見ることができた」と比較の中で理解を深めたことを報告する学生がいた。ディスカッションの時間が足りず、話し足らなかったとの意見もあるほどであった。オン</p>

ラインでも十分交流を深めることができたと認識している。

(4).将来のより本格的な留学へ発展させる

社会人になった後の選択肢として考えていた、韓国語に集中できる語学堂に更に興味が湧いたという学生、また、延世大学一京大学生セミナーを受け、韓国人学生と仲良くなったから、将来は韓国への研究所や企業で働くなど、進路を広げたいと考えている学生、そして将来このプログラムで培った韓国語の勉強と韓国社会に対しての理解を生かして国際協力等の仕事に対して意欲を見せる学生など、さまざまな意見が出てきた。今回参加した学生の中に学部生 4 回生や修士課程 2 回生が半数いることから、将来の仕事に今回の経験が役立つと考えている人が多いことが分かった。

以上のことは、(5)の各分野で国際的に活躍できる人材の育成へと直結していると考え

る。